

内科診断学 第3版

福井次矢, 奈良信雄【編】

評者

大滝純司

北大大学院医学教育推進センター教授／東医大病院総合診療科兼任教授

『内科診断学』の第3版が出版された。第2版の第1刷から約8年後の、待ちに待った改訂である。

この本は評者が診療している東京医科大学病院総合診療科の外来で、最も頻繁に読まれている参考資料の1つであり、その外来の一角にある本棚(200冊くらいの本が並んでいる)に置かれている旧版は、大勢の研修医やスタッフに8年間使われ続けて、文字通りぼろぼろになっている。昔話になるが、私が研修医だった頃に症候や病態から診断を考える際の参考書は、洋書の〈The Spiral Manual Series〉の『Problem-Oriented Medical Diagnosis』という小さな本だった。それを読みながら、日本の診療に沿った本が欲しいと何度も思った。

この本は改訂のたびに構成を大胆に見直し進化を繰り返している。今回の改訂では、最大の特徴である症候・病態に関する部分が、大幅に強化されている。その項目数は101にまで増え、各項目につき数頁ずつ、思考と診療のプロセスがわかりやすくまとめられている。一方、旧版でかなりの頁数を占めていた、個別の疾患に関する章はなくなった。これについて新

版の「序」では「他書に譲る」としている(p.V)。確かに、疾患ごとの解説は、電子教科書など優れた他の参考資料が増えている。前述したように評者が診療する現場での旧版の使われ方をみても、本書はこの症候・病態に関する部分の需要が最も多いので、今回の改訂方針はありがたい。

旧版と同様に「診断の考え方」「診察の進め方」の2つの章には、基本的な理論や考え方から身体診察や基本検査のノウハウまで、新たな知見も含めてわかりやすくまとめられている。疾患に関する章はなくなったが、具体的な症例の診断プロセスを例示する第IV章「症例編」が新たに設けられた。この症例編では多様な症例それぞれに丁寧な解説が付けられ、新版の特徴の1つになっている。診断能力を習得するには、ある程度の知識を学んだうえで具体的な症例の検討を繰り返すことが大切とされており、このような幅広い領域の症例検討の読みやすい資料は、演習形式での学習にも使えるだろう。今版は個人で利用する場合に限りオンラインの電子版も閲覧できるようになった。また、冊子体はすべての頁がカラーにな



り、索引も充実して、一覧性など紙媒体としての強みが増している。

あえて要望するならば、参考文献をある程度は示していただきたい。改訂の間隔が8年と長いことを考慮しても、症候や病態などについて項目ごとに、いわゆるエビデンスとしての基礎的な文献が数編ずつでも確認できると、診療や指導の裏づけとして役に立つだろう。

B5・頁 1,066 2016年2月
定価：本体 9,500 円＋税
[ISBN978-4-260-02064-0]
医学書院刊